



ユビキタス同時通訳機待望論

雀 部 実*

ここでは「ユビキタス」と言う単語を、「いつでも、どこでも、誰でも使える」と言う意味で使わせていただく。筆者の購読している昨年(2012年)の新聞に、世界共通言語としての英語に関する記事が、例年より多く掲載されたように思う。2011年から英語教育が小学生の段階から始められた事情と無関係ではないと思うが、記事の内容はこれと直接関係するものではなく、英語が世界共通言語でありうるのか、という観点からのものである。内容に共感できる記事を要約して紹介し、それに対する感想を述べたいと思う。

最初に注目したのは、一人の記者が3年間にわたる米国勤務で体験したことに関する記事⁽¹⁾である。この記者は自分の英語力を、共通一次試験に備えたレベルと謙遜している。いくつかの取材で不愉快な思いをした例を挙げながら、英語をネイティブ言語とする人たちに憤懣をぶちまけている。その中でも特に強烈なのが、サマーズ元米財務長官に対するものである。サマーズ氏は「英語はいまや世界言語になった。アジアでの商談も、アフリカでの治療も、中東での和平協議も、みな英語で事足りる。米国の大学はこの先もう、手間のかかる外国語教育に励む必要はなくなるだろう。」と発言している。記者氏はこれに対して、「何という尊大な言語観だろう。英語を他の国々に押し付けて平然としている。軍事でも通貨でも凋落著しい米国なのに、こと英語に限ってはずいぶん威張り方だ。ローマ帝国の最盛期でもここまで傲然とラテン語を誇った人物がいただろうか。」と憤慨している。

国立病院機構の医師からの投稿であるもう一つの記事⁽²⁾は、公的研究費による研究成果の公表方法に関するものである。投稿者は、「自然科学系の重要な研究成果のほとんどが海外の雑誌に英語で発表され、最初に日本語で公表されることはほとんどない。これらの研究は国から支出される通常の研究費や科学研究費などの公的研究費によって遂行されて、成果を挙げたものである。国民の税金により生まれた成果が、最初に国民に詳しく開示されないのはおかしい。現状では英語の発表を日本語に訳し、新しい知識を国民に還元しようとする努力の跡はほとんど見えない。一般国民が理解できるレベルを超えているから日本語で発表しても無駄と言う主

張はあまりにも乱暴だ。」と指摘している。

三つ目の記事は「ハイゼンベルクの不確定性原理に異を唱える小澤の不等式」に関する討論会の取材記事⁽³⁾である。この討論会では哲学的内容を含む相当深い議論がなされたようで、科学界では英語が半ば「公用語」であると断わった上で、「科学の土台となる考え方を議論する時には、慣れた言語で議論を深めた後、英語で発信する科学があってもよい」と言う発言のあったことを紹介して、記事を締め括っている。

以上の記事をつなぎ合わせると、「ネイティブ言語は大事であるが、世界共通言語も必要である。しかし、どこかの国あるいは民族の言語が永久に世界共通言語の地位に留まることはない。」と要約できる。

ここで、世界共通言語の歴史を振り返ってみよう。フランス革命前の王朝時代から産業革命が始まる頃までの期間は、フランスが世界文化の中心だった時代である。トルストイの「戦争と平和」を読むと、ナポレオン戦争直前のロシア宮廷の公用語はフランス語だったことがうかがえる。現在私たちが使っているSI単位系は、フランス革命のすぐ後にフランスで決められたメートル・グラム単位系を出発点としている。このSIというのはフランス語のLe Système International d'Unitésの略である。当時の英語圏の国々がフランス語圏の国々より元気であったならば、メートル・グラム単位系ではなく、イギリスで使用されていたヤード・ポンド単位系を使うことになり、The International System of Unitsを略してIS単位系と言うことになっていたかもしれない。航空便の宛先面に記入することになっているPAR AVIONも、1874年にフランス語で書かれた国際郵便条約によるものである。近年は英語のBY AIR MAILでも通用しており、世界共通言語の変化の一面を見せている。もう少し長いスパンで振り返ると、ギリシャ語やラテン語が、世界共通言語であった時代があった。すなわち、当時の世界で最強国の言葉や文化がグローバルスタンダードだったのである。

世界で最強国の言葉が世界共通言語になることに抵抗して生まれたのが、ザメンホフが考案した人工言語エスペラント語である。筆者が学生だった頃、エスペラント語を勉強する

* 千葉工業大学；名誉教授(〒273-0005 船橋市本町4-38-28-808)

Wait for a Ubiquitous Simultaneous Interpreter; Minoru Sasabe (Professor Emeritus, Chiba Institute of Technology, Narashino)

Keywords: change in language, artificial language, computer aided interpreter, mobile interpreter, requisite for interpreter

2013年2月13日受理[doi:10.2320/materia.52.379]

科学者・技術者がかなりおられたが、その後普及はしなかった。普及しなかった原因は、英語が世界共通言語の地位を持ち始めたこと、すでに修得した外国語のほかにもう一つの言語を新たに修得しなければならないのは面倒である、ということであろう。しかもグローバルに活躍される方の数が今より少なかったのである。筆者のような外国語音痴にとっては、日本語以外の言語を習得することは、面倒なことであった。それでも大学卒業のためには、二つの外国語の単位を取得しなければならなかった。学生時代は、外国語は卒業に必要な単位さえ頂戴できればもう結構、と腹の中で思いながら過ごしてきた。筆者の父親の時代の理工系の学生は、3ヶ国語を学ぶことが望ましいと言われたそうである。その時代の西欧は産業革命の成長期であり、日本は「広く海外に知識を求め・・・」の時代であったが、世界共通言語は存在しなかった。そのため英・独・仏の3ヶ国語を学ぶことが望まれたのだろう。しかも、その世代の人が社会人となって活躍する頃、ソ連の科学・技術の進歩を無視できなくなり、意識のある一部の科学者・技術者は、社会人となってからロシア語の勉強をはじめていた。筆者の大学教員時代の後半、すなわち筆者の子供達の世代は第2外国語を必修科目とする大学は少なくなっていて、外国語として英語だけ修得すれば、卒業可能になっていた。この習得すべき外国語の数の減少傾向が続くとすれば、孫の世代は外国語習得不要の時代になるのだろうか。そうすると、異なるネイティブ言語を使用する人と人との間での意思疎通は、できないことになる。これではグローバル社会は成り立たない。そうであるならば、世界共通言語だけを使用すればよい、という意見が出てくるかもしれない。その極端な例として、それまで公用語として使用していたフランス語を普仏戦争の敗戦により、強制的にドイツ語に転じさせられたという歴史を持つ独仏境界のアルザス・ロレーヌ地方を挙げることができる。現在はこの地方はフランスに属しフランス語が使われている。異なった自然言語を使用する人々が一緒に生活している地域を持つ国は、今でもある。このような国では複数の公用語を持つことを永いこと続けている。このような国が今でもなお存在するということは、複数の自然言語の使用をやめて特定な自然言語に統一することは難しい、ということを示唆している。したがって、ネイティブ言語と世界共通言語が共存することは、グローバル社会では必要ということになる。その時代の経済的・軍事的に最強である国が使用している言語が世界共通言語になる、ということになると、現代では英語が世界共通言語として最も相応しいということになる。しかし歴史は、アメリカがいつまでも世界最強国であることを保証はしていない。つまり、英語が世界共通言語であり続ける保証はない、ということである。せっかく身に着けた外国語が無駄になり、また別の外国語を学びなおさなければならなくなるとすれば、それは個人にとっても社会にとっても大変なことである。

それでは、これからの世界共通言語というものはどうなるのか。人間と機械の関係から考えてみよう。人間の活動を筋肉労働と頭脳労働とに分けて考えよう。18世紀後半からは

じまった産業革命により、人間の筋肉労働のかなりの部分を、化石燃料と機械のコンビが受け持ってくれるようになった。しかし、産業革命の時代には、頭脳労働を引き受けてくれる機械は存在しなかった。20世紀中葉に出現したコンピューターは、反復繰り返しの頭脳労働を受け持ってくれるようになった。ここにはじめて頭脳労働を支援してくれる機械が出現したことになるが、その計算速度は遅かった。現在では文章を翻訳できるというソフトがいくつか出てきている。インターネットで同時通訳を検索すると、同時通訳を提供するサービス業に関する情報は出てくるが、このサービスは通訳者が介在する場合が多い。機器を貸し出すサービス業も存在する様であるが、ここでも通訳者が介在しているようである。そのため、いつでも、どこでも、誰でも便利に使用できる、というユビキタス性には欠けておりその性能にはまだまだ不満がある。しかし、コンピューターの計算速度は年々速くなっており、ソフトの性能も年々向上しているようなので、頭脳活動の一つである言語活動をコンピューターが支援してくれる時代が来そうな気がする。

文章翻訳機が出始めたころに、コンピューターの専門家に同時通訳のできるコンピューターの出現の可能性を訊ねたところ、音声認識の問題が解決されれば可能かもしれない、とのことだった。しかしその後、別の人たちに同様の質問をしても、「そんなものは、できっこない。」という返答が圧倒的に多かった。昨今の情報を見ると音声認識はかなり進歩しているように見えるので、これに関しては希望が持てる。

その道の権威者に「そんなものは、できっこない。」と断言されたものが、その後すぐに実現している例として、次のようなものがあるそう(4)。アメリカの有名な天文学者サイモン・ニューカムは、航空機の実現について、「空気より重いものが人間をのせて空を飛ぶことは、およそありえない。」と発言した。ところが、ライト兄弟の飛行機が飛んだのはその翌年である。また、イギリスの著名な科学者リチャード・ウィリーは、1956年に、「宇宙飛行の実現などは、完全に問題にならないばかりのことだ。」と公言したが、人類最初の人工衛星がソ連によって打ち上げられたのはその翌年であった。大陸間ミサイルの可能性がアメリカ議会の委員会の問題になったとき、核兵器に関する権威者ヴァネヴァー・ブッシュは「核兵器がICBMのようなミサイルの弾頭に収まるほど小さくなることはあり得ない。」と断言した。この発言がアメリカのミサイル開発に10年の遅れをもたらしたそうである。これらの例が示すように、将来の新しい技術についての見通しはむずかしいものである。

ここに示した予言の失敗例をみると、「同時通訳のできるコンピューターなどは、できっこない。」という予言が外れることもありそうなので、世界共通言語の実現のためにコンピューターの果たす役割を期待する。このコンピューターをユビキタス同時通訳機と呼ぶことにする。ユビキタス同時通訳機に対し筆者の持つイメージは、次のようなものである。機器の大きさは携帯電話機程度の大きさが好ましい。機器内には音声変換装置と自然言語を人工言語に変換するソフトを

ユビキタス同時通訳機の出現で得られるメリットに、次のようなものがある。まず、前出のサマーズ氏の言葉を借りるなら、手間のかかる外国語教育に、世界中が励む必要はなくなる。そうなると、これまで外国語を習得するために個人と社会が費やしていた膨大な時間と費用が不要になり、ゆとりが生まれる。しかし、ゆとり教育の失敗を繰り返してはしくない。生まれたゆとりは人類の将来を幸せにするために利用

何種類もの人工言語が世界の中に存在すると、ユビキタス同時通訳機は「人工言語 $D \Leftrightarrow$ 人工言語 E 」のような余分な変換機能を持たなければならないので、具合が悪い。共通言語として使用する人工言語は一種類であることが好ましい。日本語は他の自然言語に比べかなり独特の文法体系を持っているので、これがハンデキャップにならないようにするため、日本は世界共通の人工言語の作成に早くから積極的に関与する必要がある。そして、ユビキタス同時通訳機の出現は、政治的にも、経済的にも、文化的にもグローバルに影響を及ぼすものなので、ナショナル・プロジェクトの一つのテーマとして、ユビキタス同時通訳機の開発を取り上げることを提案する。

- (1) 山中季広：受験英語ですが パードン？，
朝日新聞 2012年4月8日朝刊13版 11面.
- (2) 林 俊行：研究成果 和文でも公表を，
朝日新聞 2012年5月11日朝刊12版 15面.
- (3) 尾関 章：日本語で論じる科学，
朝日新聞 2012年4月28日夕刊3版 2面.
- (4) 雀部高雄：鉄鋼技術論，ダイヤモンド社，(1968年)，3.



★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★